最狂雑記帳

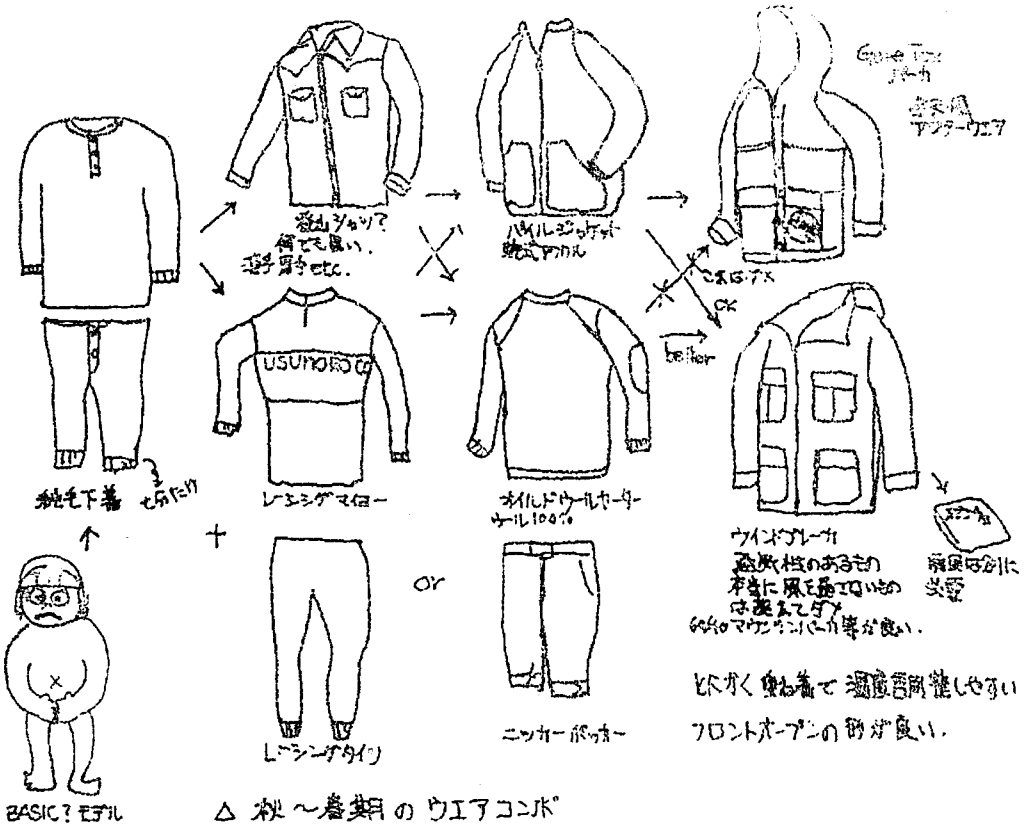
4年　小島 正也

少年はもがき続けた。少年の頭の中には前を行く自転車に追いつく事しかなかった。少年の自転車は、つけたばかりの「ドロハン」が真新しい他は、333と刻印された前変速機もふくめ、ストックのJr.スポーツであった。少年は脚の回転を上げようとした。しかし、ペダルから足が外れそうになるばかりで、前の自転車はみるみる少さくなっていった。「は、あ、ど、だ、ぜ、。」と少年は捨てるように言った。少年の車輪は鉄だったのである。

I.「はーど」の話

僕がサイクリングを始めた頃に比べると、ずい分と便利になったものだと思う。「ニューサイ」の厚さも倍程に見えるし、だいたい、自転車自身マスプロ車がたいへん良くなった。部品も充実してきた（改良の余地はまだまだあるが）。しかし、一方では、用品といい、その他組織、施設などまだまだ進歩したと言えないものが多い。

特にサイクリング用のウエアというのは決定的なものに欠けているように思える。例えばズボンであるが、夏はショーツを使うので、（というか、他に何かあるかといえば、ないのでしかたがないが）まあ問題はない。そういえば、ずい分昔のニューサイに、男子のなには空冷式だからなるべく風通しの良



△ 秋～春期のウエアコンポ

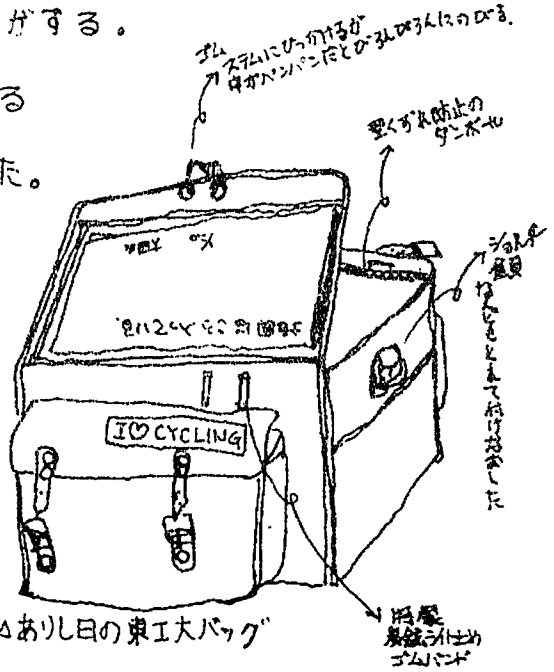
いものを選ぶようになどという話があった。ジーンズはその点では人類の敵だそうで、愛用者はチャックを開けて走るのが良い(?)そうですよ!。合宿ではNと一緒にされるのがいやでニッカー(ウィスキーに非ず)を使わないが、Yのようなレーシングタイツはシルエットがきらいで、やはりニッカーが良いように思う。特に寒い時は、膝の保温と運動しやすさという点で、膝に余裕のある事はたいへんにありがたい。しかし登山用のはポケットの位置とか、膝の余裕という点でうめが足りない。専用のものを誰か作ってくれないかなあ... というところでしょうか。

雨具はポンチョが私のお勧め品で、薄手のものなら非常にコンパクトにたためて良いし、いざという時にはセパレート型の

雨具よりも蒸れが少なくて良い。最近注目されているゴアテックスは、確かに雨具としては良いものであるが、ヒルクライム時などの発汗量の多い時（そしてスピードののろい時）には、やはり蒸れを感じる。特に発汗量の増加時には、他の素材のものと同じであるが、定常になると、割合快適である。ゴアの利点は、ウィンドブレーカーと兼用で装備を軽くできる事などであるが、自転車につきものの油に弱い（通気性がなくなる）、オイルドセーターが使えない、感触がほんとうにゴアゴアしている（ゴアってカサバル！）、などの欠点がある。また価格が高い（フッ素系の材料である為）のも痛い。

フロントバックも最近は良いものが多い。が、使いなれた後開き式のもの（いわゆる東工大バッグ）が消えたのがさみしいしだいである。走りながらパンを出して、むしゃむしゃと食べる事がずい分多かったような気がする。

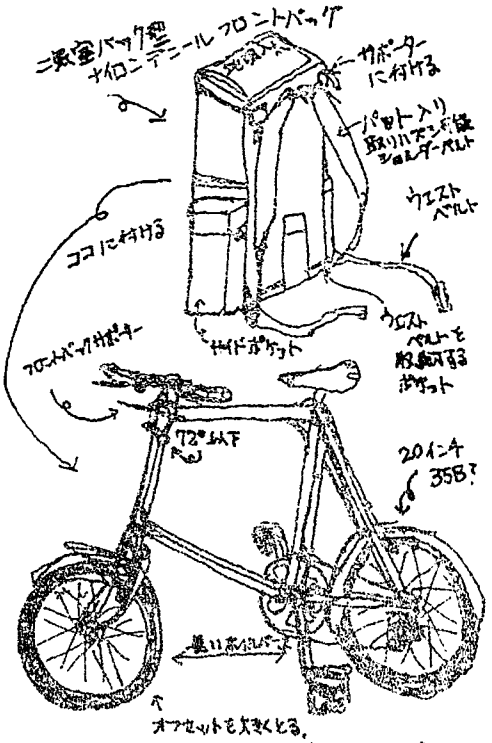
最近は、デイパックに使われているデニールナイロンのバックが出てきた。T社のものは、バック自身に腰がなく、後ポケットがマジックテープなので耐久性という点で少々気にいらない。BSのFB12というのが東工大バック式で中仕切まで付いているのだが何と6500円もするので、中型バックとして欲しいのだが手を出



Aありし日の東工大バッグ

しかねている。サイドバッグもこの手のアメリカ式のものの登場が望まれる。

輪行というのは、昭和初めの競技者が使っていた言葉で、競技場まで乗って行く意味だったらしい。ところが輪行が輪(ワッパ)で行くことでなく、輪(ワッパ)を持って行く意味になったのは輪行袋のせいらしい。輪行に代る意味で名ずけられたその袋は、本来の意味での輪行をしている時には無用の長物である。がといって、あのワープ行法(?)の魅力は一度味わうと忘れがたいもので、野崎さんが使っていたポケットヤッケ大にたためるものはうらやましい限りだったが、財力の点で特注で作らせる事も出来なかった。しかし最近Hサイクルから似たものが出されたので、近いうちに使ってみようと思っている。



△バスハンディング　ミニ(作りたいなー)

サイクリングというのは、わり合簡単に出来るものである。が、より快適に、より限界にとなると、ハードウエアも決しておろそかには出来ないと思う。より自然に近い場所へ、より遠くへ、より高い峠へ、より楽に、より余裕を持ってサイクリング出来る為に、参考になれば「幸い」であると思いつつ、この項を終ります。(誰かガッタ屋に親しい人がおったら宜く(ヤキムパタガ)でバック紹介してくれ――!)

Ⅱ 「ソフト」編 —— 旅と自転車と人生 ——

自転車で旅をするという事は、旅をただ単に移動としてとらえるのなら、これ程効率の悪い手段はないであろう。しかし、旅の心、旅の本質をとらえるという点で、自転車の旅は他の手段に比べて優れていると言える。

旅とは何か、という問題に対して形而上的解析をしている中で三木 清の「人生論ノート」の中の「旅について」は明解である。確かに旅の感情を抱く事は如何なる旅でも可能であろう。しかし、旅を過程としてとらえる（三木 清の言葉を借りるなら、『旅の真の面白さ』を知る）という事では、磨耗さのない遠さを連続して しかも自力で体験することの出来る自転車は、旅を学ぶ道具として優れていると思われる。

旅と人生が根本的な問題で一致している点は、「旅について」で書かれているとうりである。即ち『何処から何処へ、という事は、人生の根本的な問題である。』『人生は未知のものへの漂泊である。』などのように、旅は人生に似ている。

「人生は浪漫だ。」という言葉がある。「浪漫」とは、単に夢想的、感傷的なという事ではなく、「浪漫主義的な」の浪漫ととらえなくてはならない。浪漫主義を説明する最もポピュラーな例は、メーテルリンクの戯曲「青い鳥」であろう。最終章でチルチル（ライターに非ず）が「なんだ、これが僕たちがさんざん探し回っていた青い鳥なんだ。僕たち随分遠くまで行った

けど、青い鳥ここにいたんだなあ。」と言う事によって、我々は自分の現状での不満、不快→放浪→再帰による発見、不満の解消というプロセスが浪漫主義である事に気付く。

我々は「人生」という旅において「何処から何処へ」行くのであろう。それは誰も具体的に説明しえない未知から未知である。旅の形が様々であるように、人生も人それぞれの形がある。しかし、旅の本質が変らないように、人生の本質も変らないのではないだろうか。

現代人は内向化しつつある、という話がある。それは巨大化する社会の中で、我々が旅に出る事を忘れてしまった為ではないか。人々は不快、不満に対する処理法を失ない、無力感にひたり、無感動になり、不快、不満に対して鈍化する。浪漫の出発点すら失ない過去を止めた現代人の行先は何処なのだろう。善意を持った個人が、一度集まると偏善や不善をなすような矛盾した現代日本社会で、この蓄積された不快のエネルギーが、誤まった方向へ吹き出されなければ良いのだが。

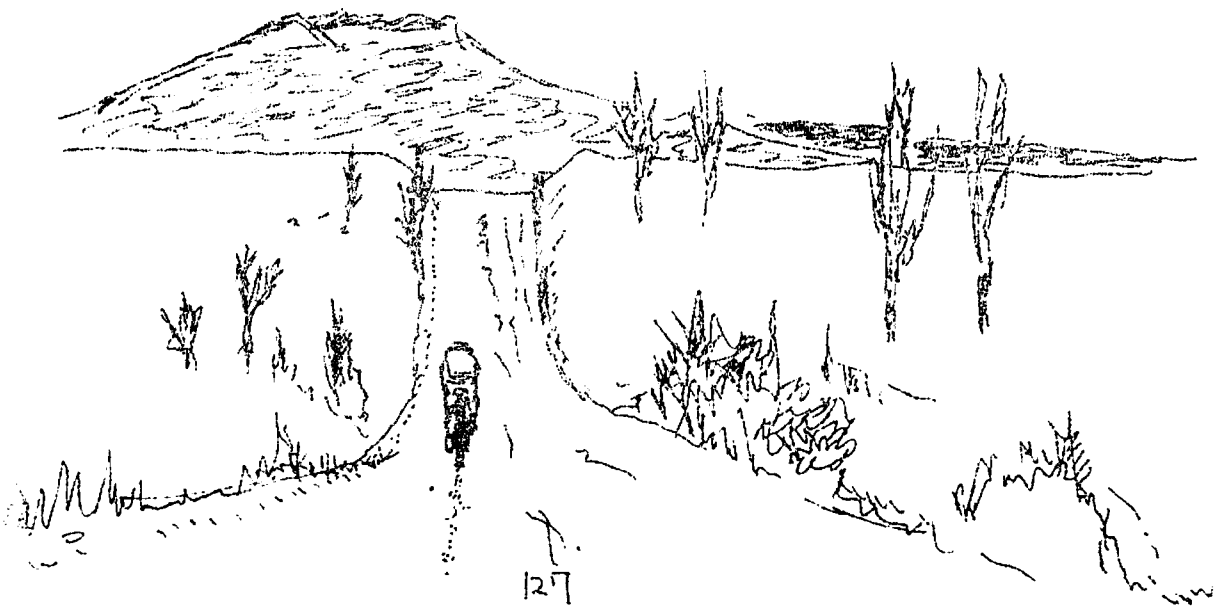
『旅において出合うのは、つねに自分自身である。』と三木清が言うように、旅に出ず、内向し、「しらけ」る人は、自己と出合うチャンスを失なう。こういう人は、利己的ではあっても決して夏目漱石の言う「自分本位の立場」には達しえない。漱石の「則天去私」とは決して自己を抑圧抹消する事ではなく、「個人主義」を確立した後の浪漫主義的解消による自然の境地

に達する事を示すのである。

三木　清は、「旅について」の結びで言う。『真に旅を味い得る人は真に自由な人である。旅することによって、賢い者はますます賢くなり、愚かな者はますます愚かになる。日常交際している者が如何なる人間であるかは、一緒に旅してみるとよく分るものである。人はその人それぞれの旅をする。旅において真に自由な人は人生において真に自由な人である。人生そのものが実に旅なのである。』

私が、この4年間に経験した旅の中で、「真に自由」な心でいられたろうか。まだまだ「動きながら止まり、止まりながら動く」事を学ぶ前に旅に出なくてはいけないようだ。

「かわいいコには旅をさせろ。」という言葉があるが、私はみんなが自己を確立し、真に旅を味い得る人間になる事を、自転車を通じて実現する事を心から望む。（この項終り）



Ⅲ．理屈ぬきの話

「旅」を抜いても、自転車っていいよ。何故乗るかって？そりゃ、もちろん好きだから乗るのさ。

自動車だって好さ。でも自転車はもっと好だよ。

確かにつらい時もあるよ。もう投げ出して、やめちまいたくなる時だってあるよ。

でも、結局、好きなんだよ。

お金もかかるよ。手間もかかる。それでもホコリまみれで放っておくのは、可愛そうだよ。フレームのキズがサビ色になっているのは、可愛そうだよ。

そんな時は、きれいにみがいて、プラカラーで化粧してやるのさ。

走る意味を考える事は大切だよ。でもね、走るのに必要なのは理屈じゃなく、たった一つ、「好き」って事さ。

年寄ぶって、もうだめだなんて、走れないなんて、そんなのはごまかしだよね。暑いから走れないとか、寒いから、冬だから走れないなんて、そんなのは嘘だよ。

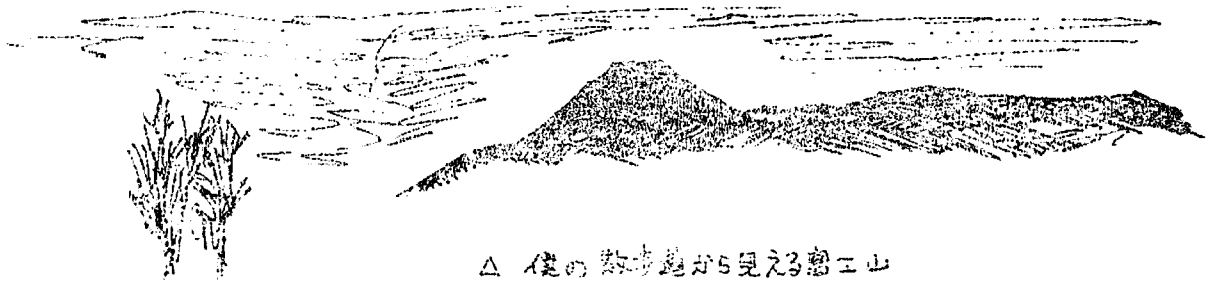
何にも照れることはないんだよ。

そう、みんな自転車が好きなんだ。

例えころぼうと、パンクしようと。

好きだから、自転車に乗っているんだよ。

（今日の歌詞　ぼうぼう焼くのは　ばかったれ　三木のり平）



△ 僕の散歩道から見える富士山
この美しい色をお見せ出来ないのが
ほんとうに残念です Hi.

五 散歩の話

僕は冬の夕暮れが好きだ。落葉樹のシルエットの銅版画のような繊細さが好きだ。日が沒してしまった後の、オレンジ色のバックに浮び上った山の端と、深い空の色が好きだ。だから、このところ正月をよいことに、毎日のように近所に散歩に出かけている。

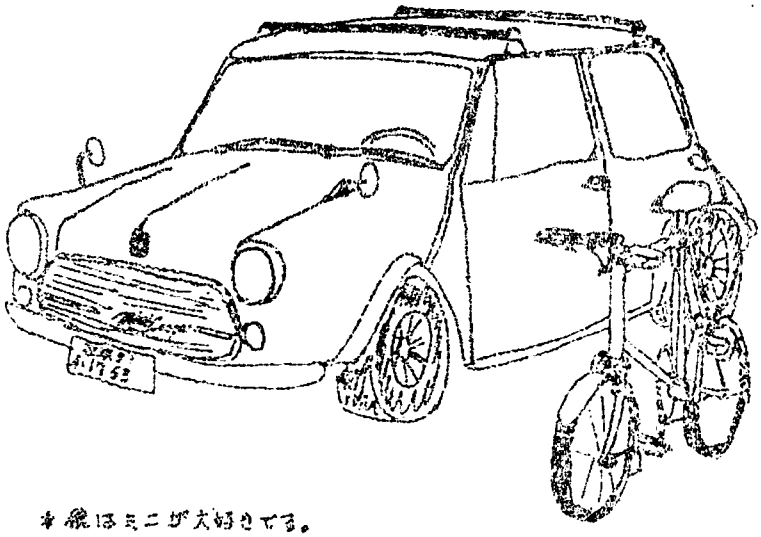
実は、最近オールランダーを付けたので、とにかく使いたいというのが本音といわれても否定しがたいというところである。

僕の住んでいる所は、多摩丘陵が海にぶつかる所だから起伏といったらかなりのもので、崖のある岡の上によじのぼる事を考えると、坂をくるスピードもためらいがちになる。とにかく尾根へ出ぬ事には景色がよくないので、散歩となると尾根歩きが主になってしまう。尾根道といっても住宅地だから、風景を見ながら走れる場所は限られているけど、ある所にはちゃんとあるし、意外と公園が多いなどという発見もある。

子供のころは、かなり広域に渡って遊び歩いていたつも

りだけど、やはり一寸走ると知らない道もけっこうあるので、おきまりのコースに少し冒険を盛り込んでみたりする。これがけっこう面白く、突然に「あれ、こんな所に出るハズじゃなかった」と知った場所に出ることもあれば、袋小路に迷い込んで、「しまった、しまった。」と頭をかいてUターンなどという事もある。

小径をのんびり走るのも、また国道をガンガン飛ばすのと異なった良さがある。富士山のシルエットが空と同じ色になる前に、もう少し眺めていたいと思う心を抑えて、帰る事にしよう。明日も晴れれば良いなあ、などと思いながら。



＊僕はミニが大好きです。
車も自転車も どっちも今はもってないけれど・・・・ でもどこかにボンマイが付いていそうなミニが欲しいなあ。絶対自動車みたいだといわれても、とにかくミニが好き！
（モチロン スカートも！？）

V. 出だしでつまづくはなし

↑ほんとうはここでやめて読まれるような事を書きたいんだけど・・・・

イテッ

i)峠のボトル

再び上りが急になって、苦しく目ってきたので、視線が下を向き始めた。ギアを落そうと下を見ると、ダウンチューブが全部見える。あれ、ボトルがないぞ。弓池のロッジに置いてきちゃったよ。自慢の保温ボトル。山田峠から弓池はかなり下っていたので、僕は完全にあきらめてしまった。だからして淡峠では何故(トウゼン)ボトルがなかったのである。

ii)駅

上野駅で偶然一緒になった亜尾が降りてしまった特急の車窓をながめながらも、天気のことが心配だった。小出の駅で降りると、プラウスで「東工大の小島様、伝言が御座居ます。」とのこと。はて？なんじゃろほい。と少々いやな予感がしたが、改札へ行くと、駅員が「郵便局から電話がありました。すぐに家へ電話するようにとのことです。」(ガビーン！)心配していた雨は降り出すし。しばし呆然としていた。かくして、只見の郵便局には、是が非でも行かねばならなくなった。雨の中電報為替をたよりにして。

iii)棟句

僕のタイヤはごく普通のものだし、ペダルだって名はユニークだけどオーソドックスなクイル型だ。ところがこれらを一瞬のうちに麻痺させる言葉がある。僕が、たった一言いうだ

けで良い。「さあ、行こうぜっ!」 かくしてチューブ内の空気は根室や本宮川湯などの大気に噴出し、ペダルは沼田の駅前で地べたにひれ伏すのであった。 XO〜!

iv) 脱線

富士山T.T.に出る前に少し走ろうと思い、早朝新宿駅へ行くと、脱線で甲府折り返しだという。急行に乗れないので急行料金をもうけたとばかりに、各停によっこら乗り込んだ。発車まぎわに乗って来たよっぱらい氏が、ロングシートの俺の前に座った。彼は輪行袋を見て、「おい、なんだそりゃ」「ちょっとこっちへ座れ」小生やむなく相手をする。「だいたいあんたら冒険家は〜」富士山に登るといったら何か感違いをしたらしい。適当にあしらっていると、一見アル中の、目つきの少々おかしな彼は他のボックスシートへいって何やらからんではもどって来る。やむなく話に乗せて引き止めるが、立川までが長く長く感じた一日でした。

v) 再びボトルの登場

ぬらしたボトルカバーがなかなか乾かないので、不思議に思ってボトルをしらべると、アルミの底 ポタポタと中味が出て来ている。中味をすてて、空にすかして見ると、みごとに小穴があいている。セロテープをやむなくはっておくことにしたが、さて買ってから半年もたっていないのに、コニロに乗せられないアルミボトル、いったいどうしてくれる!。

(完)